

2008 年度

科目名 文化人類学	対象学科・学年 教育教福 2 回生	担当者 坪井 恒彦
授業テーマ 考古学・民俗学の成果を援用し人類（日本人）の文化の祖型を考える。		
授業の概要と目標 20 世紀のアメリカで構築された「文化人類学」の理論・方法論は、日本地域にはそのまま当てはめられない側面を持っています。本講座では、文化人類学の目的を堅持しつつ、理論・方法論に日本の考古学・民俗学の考え方を取り入れ、「人間とは何か」を、彼らが創り出した文化、そして文明を通して追究していきたいと思います。そこには、私たちを取り巻く現代社会が抱える様々な課題を解きほぐす手がかりが隠されており、将来を見通す「眼」を養うヒントがあるのではないのでしょうか。		
評価方法 前期末・後期末の各時間内レポートの内容により評価します。出席状況も重視します。		
テキスト 自作のレジュメ集、資料のコピーを配布します。	著者	出版社
参考書 『文化人類学』	編著者 村武精一ほか	出版社 有斐閣
授業スケジュール・内容 1. 「文化人類学」とは 2. 文化人類学の歴史 3. 「文化の変動」について 4. 「日本文化」の特性を考える 5. 日本民族の起源を追う 6. 狩猟採集社会の実像 7. 「土器誕生」の周辺 8. 「縄文農耕」の実態 9. 「定住集落出現」の意味 10. 「配石遺構と土偶」の文化 11. 縄文祭祀における仮面文化 12. 縄文巨木文化の背景 13. 縄文時代の流通・交易の文化 14. 縄文人の精神文化再考 15. 時間内レポート 16. 列島の「金属器文化」の特性 17. 「弥生環濠集落」の系譜 18. 水田稲作複合（システム）の影響 19. 「弥生神殿」文化の真相 20. 文化人類学から見た「弥生大型建物」 21. 弥生の司祭者「鳥装のシャーマン」 22. 「銅鐸文化」の実相 23. 「倭人争乱」の文化人類学的な解釈 24. 古墳時代の「導水祭祀文化」をめぐって 25. 古墳時代首長層の精神世界を探る 26. 遺跡から読み解く飛鳥人の思想 27. 飛鳥の「苑池文化」の国際性 28. 飛鳥京の宮殿文化を考える 29. 「日本語」の形成と普及 30. 時間内レポート		